

現地の声に耳傾けて

財団法人大阪国際児童文学館と毎日新聞社などは、東日本大震災の被災地に本を贈る「いっしょだよ」キャンペーン



ンペーンを進めている。作家のあさのあつこさん(56)に、被災地への思いや本の魅力を聞いた。

【聞き手・反橋希美】

作家 あさのあつこさん(56)

—岡山県美作市

東日本大震災で被災した子どもたちに本を贈る「いっしょだよ」キャンペーンに取り組む財団法人大阪国際児童文学館、大阪府書店商業組合、毎日新聞社、毎日新聞東京・大阪・西部社会事業団は、本の配布先を募っています。本を失い必要としている学校、幼稚園、保育所、児童館、地域文庫などが対象です。施設や子どもの人数、



年齢などに応じて本を選んで購入し、汚れや破損を防ぐ保護カバーをつけて届けます。避難所の場合

は、閉所後は学校図書館などへの移管をお願いします。

問い合わせは(財)大阪国際児童文学館「いっしょだよ」キャンペーン事務局(☎06・6744・0581 <http://www.iiclo.or.jp>)へ。

寄付金は毎日新聞大阪社会事業団(郵便振替00970・9・12891)へ。通信欄に「子どもの本」、紙面掲載で匿名を希望される方は「匿名希望」と明記してください。

先日、宮城県気仙沼市に行きました。海と重油のにおいが立ちこめる地に立ち、ここで生きるとはどういうことだろうと考えました。仮設住宅に住む母親た

ちは「子どもはずっとここで育てます」と話していました。インフラとか経済面で復興が語られがちです。でも子どもたちが、どうこの先を生きていくのか、表にでない人たちの声を聞く姿勢がいます。震災後、物語を書きたい

気持ちが増しています。こんな時だから物語は必要とか、無力だとか言うつもりはありません。でも大切な人を亡くした高校生から著書を読んだと手紙をもらいました。どんな時でも本を読んでくれる人がいます。その事実を大事にしたいです。